

第一回日本医学会論争

—— 鷗外初期のたたかい ——

磯 貝 英 夫

一

わが国における最初の全国医師集会である第一回日本医学会がひらかれたのは、明治二十三年四月である。当時、この会合の可否をめぐって多くの論議がまきおこったが、森鷗外はその主要論客であり、しかもかれは、この問題を主契機として、結局、当時の医界主勢力と決定的な対立関係に入ることになる。この事件は、鷗外初期における最も重要なできごとと言ってもよいのであるが、その委細は、なおあきらかにされていない。以下、私は、調査しえたところによって、この論戦の全経緯を展望したいと思う。（拙稿「森鷗外の批評運動——その一、医事評論について」））『広島大学文学部紀要二〇号』Ⅴ、拙稿「鷗外医事論争」）『近代文学論争事典』Ⅴ参照）

二

二十二年六月一五日の『東京医事新誌』五八五号に、つぎのような

「第一回日本医学会創立広告」が掲載された。

「往年吾曹相会シ乙酉会ト名ツケ私ニ我医学社会ノ為ニ相謀ル所アリ来ル明治廿三年ハ国会開設ナリ勲業博覧会ナリ全国ノ人士東京ニ会スルノ秋ナリ此時ニ当リ東京ニ内国同業ノ有志者相会シ學術上ノ知識ヲ交換スルハ蓋シ我医学社会ニ於テ無益ニアラサルヘント信シ我聖會員相謀リ創立資トシテ先ツ仮ニ各金百円ツ、ヲ醸出シ日本医学会第一回ヲ催サントス因テ創立主意書ヲ四方ニ頒チ同志諸君ノ賛成ヲ希望ス其開会月日細則等ニ至テハ會員ノ概数定マリテ後チ更ニ送付ス可シ」

なお、このあとには、数ヶ条の簡単な創立主意書が附載されている。発起人は、岩佐純、伊東方成、池田謙齋、石黒忠恵、橋本綱常、長谷川泰、戸塚文海、高木兼寛、長与専齋、大沢謙二、佐藤進、奥吉安純、三宅秀の一三人の乙酉会員であり、いずれも、明治医界の長老たちである。（乙酉会は一八年結成。）

この提唱に対していち早く論陣をはったのは『医事新聞』である。六月二五日の同誌三〇五号は、事の次第を報道するとともに、

主筆田代義徳の署名によつて、「日本医学会ニ就テ卑見ヲ述ブ」という論説をかかっている。田代はそこで、この企画を基本的には祝福しながら、この会を純粹な学会とすることに疑問を提出している。其の學術研究は、こういう一時の祭礼のようなものによつて大した利益をうけることはないで、それより、脚氣とか食料とかの實際問題についての対策を話し合つたり、また、医薬分業、医風改良などの「業務上ノ問題」を議したりすることの方が実りがあるう、というのがその言い分である。そして、この会の名称を「日本医学会」ではなく、「日本医学会」とすることを希望し、もし学会とするならば、どうして、会員を開業医に限つて、医科大学生その他の研究生を省いたのか、とつっこんでゐる。

田代のこの意見に対し、発起人石黒忠恵は、ただちに、個人の資格において（そうごとくわつてゐる。）丁重な返事を寄せ、それは、同誌の三〇六号（七・五）に掲載された。石黒は、そこで田代の注意に謝しながら、「差岡へ」があつて單純な学会にした旨を述べ、「如此致置候へは後年此会発育して独逸の万有学会の如くにも相成可申歟其完成を数回後年に期候事に候」と、望を将来によせてゐる。また、会員を開業免許取得者以上にかぎつたことについても、便宜の方法として逃げたうで、最後に、乙酉会員がそのまま発起人となつたことについて弁明して、「或は世上にいらさる御世話の世話人と申され候も難計候へとも斯学の為に執る勞と嘲とは甘受の積りに候」と述べてゐる。

実は、この最後の陳弁の部分にこそ、当時の医界の、この華々しい提唱に対するひそかな猜疑はあつたと見てよいので、『医事新聞』は、石黒のこの弁明になお納得せず、三一一号（八・二五）の論説

において、端的にその点を指弾するにいたつた。天随子の「黄金ト日本医学会」がそれであるが、かれはそこで、実力者としての乙酉会員の発起は一応認めるとしても、発起人の百金讓出の件は不快に堪えぬとして、つぎのようにきびしく論じてゐる。

「若シ諸君ニシテ海内ノ医師ヲ招待饗応セラル、存念ナラババイザ知ラズ荷クモ學問的ノ集会ニ貴賤尊卑ノ差別ナク一様ノ会費一様ノ權利ヲ享受スルヲ至当ナリトスレバ此學ハ聊カ撞着スル所アラン発起者ハ皆ナ主人ニシテ來会者ハ悉ク客タルノ如キ景況アラバ如何：且ツワガニニモ此会ガ偶マ先輩ト後進ノ間ニ横ハル惶濛ヲ益深フシテ一層先輩崇拜ノ弊風ヲ助長シ又タ是レヨリシテ稍ヤク黄金ガ學問界ニ勢力ヲ有スルノ僮ヲ作クルガ如キ事アリトセバ如何、」おなじ一文のなかで、乙酉会を医者社会の薩長であるとすると他人の言を首肯していることなども注目されるが、とにかく、これは、乙酉会の独走に疑心をもつ医界の一空氣を代弁したものと見てよいだろう。

そして、こういう論難に対してただちに応じて立つたのが森鷗外である。ここで、この時の鷗外の立場について説明しておく必要があるが、かれは、当時、『東京医事新誌』の主筆の座にあり、緒論欄によつて、その時評活動を一手にひきうけていた。しかも、その『東京医事新誌』は、第一回日本医学会の後援団体たることを約していた様子で（實際会合が開かれたときには、新誌千部が参会者にくばられてゐる。）、だから、鷗外は当然この提唱の擁護者たるべき地位にいたわけである。したがつて、鷗外が『医事新聞』の批判にいち早く立つてこたえたのも、その立場上まず当然ということになる。

だが、『東京医事新誌』五九八号(九・一四)に出た「医事新聞ニ就テ」というその応答の論法は、そういう立場の発言としてまことに微妙なものを持っていて、かれが、結局のところ、有益な運動の発起人はだれであつてもかまわぬはずだと言ひ、百金の譲出ということも実際に必要なのだと言ひたしたのは、立場上いわけば当然の発言であつたわけだが、その一方、かれは、『医事新聞』の論議の敏を口をきわめて称揚し、その論者をもつて、小池学士と太皐道士とあわせて「天下ノ三絶」とまで呼んでゐるのである。つまり、論者の懸念に理はあるけれども現実にはその心配はない、というのがかれの論法にはかならぬのだが、一文のアクセントはむしろその懸念の方にいかかつていて、全体としては、それは、乙西会同人に対する間接の釘さしといった観を呈してゐるのである。鵬外個人の心底には、天随子に共感するものがつよくあつたと見ておそらくまちがいないだらう。

だが、その表面は、もちろん第一回日本医学会議の弁であつたわけで、それへの反撥は、ただちに『東京医事新誌』への投書となつてあらわれた。同誌五九九号(九・二一)に、「充分ニ公議ノ在ル所ヲ探テ以テ偏頗ノ弊ヲ免レン」ために、という編者(多分鵬外)の添えがきをつけてのせられた、摺齋居士の「日本医学会ニ付テ」がそれである。居士は、そこで、西洋とちがつてごくわずかな「真正ノ医学者」を持つてゐるだけのわが国では、西洋風の内国学会をひらいたところで大した効果はないと、時期尚早論をとなえ、あわせて、乙西会員の百金譲出の非合理をさらにきびしく難じた。

乙西会の第一回日本医学会案を徹底的に分析究明した鵬外の長論「日本医学会論」(『東京医事新誌』六〇〇—六〇二号八九・二八

△全集に十八日とあるは誤りV(一〇・一二V)は、活字の上において、以上のやりとりの上に生まれたのである。これだけでも、乙西会の提案をめぐつて実際にかなり騒然たるものがあつたことがしのばれる。

「日本医学会論」において鵬外のとつた方法は、乙西会案とドイツの「自然学者及ビ医家ノ会」の条例との比較対照論法である。かれはまず、かつて自分たちが『東京医事新誌』五六六号(二・三)において、ドイツのその学会に匹敵すべき日本医学会の生誕を希望した文章にふれつつ、実際にあらわれた乙西会案がドイツのそれとずいぶんちがうことを指摘し、以下、逐条的に、第一回日本医学会広告ならびに主意書と、「自然学者及ビ医家ノ会」の条例との異同を弁じて、乙西会案の特質をあきらかにしていったのである。

それはいかにも鵬外らしい綿密なものであつたが、その主要論点はずぎのようなものである。(一)、日本医学会は、乙西会という久存の会の催す一時の集合であつて、ドイツ学会のような恒久的性質のものではない。(二)、日本医学会の目的は「知識の交換」にあつてドイツの学会のような「学問ノ輪推」にはない。この目的措置は、わが国医界の現水準に適切なものである。(三)、したがつて、会員も開業免状所有者以上となつていて、ドイツ学会のような研究者主体の会員とちがつてゐる。また、会の重点も、乙西会の聘した諸名家の「學術的演述及ビ実験」におかれていて、会員は主としてその知識を受ける立場におかれてゐる。これは併行等立するドイツ学会の研究発表会とは異質である。(四)、「學術的演述」の性格規定、また、会員の提出する医学的物件の処理規定がいまいである。(五)、ドイツ学会の会則はすべて会員の多数によつて決められることにな

っているのに、日本医学会のそれは、すでにその概則を乙酉会が定め、細則もまた乙酉会が決めるものようである。こういふありようは(三)・(四)の事態をふくめて、「純然タル一学会ノ規則」としては、「白壁ノ微瑕」である。

ざっとこんな風に論じて進めて、最後に、今度の計画が「第一、回日本医学会」で、「日本医学会」でなかったことを「痛惜」し、第二回のそれは果たしてひらかれるのか、ひらかれるとすれば、だがが創立し、だれが解散するのか、と問いかけ、結局、つぎのように論断する。

「余等ハ此会ノ他年我邦ニ起ルベキ彼ノ独逸ノ自然学者及ビ医家ノ会ニ匹適スル学会ノ為ニ其端ヲ闡ケルヲ疑ハズ而レドモ『第一回日本医学会』ハ自ラ特殊ノ面目ヲ存ジ、此典型僅ニ之ヲ明年、頃刻ノ集合ニ応用スベクシテ之ヲ永遠ニ保護スベカラズ若シ他年成就スベキ善美ヲ尽セル学会ニシテ又『第何回日本医学会』ト称シ此集合ノ遺蹟ヲ踐マントスレバ、余等其決シテ能ク為スコトナキヲ知ル」私たちがこの文章の全体を読んで感じざるをえないのは、さきの「医事新聞ニ就テ」とほぼおなじニュアンスである。かれの論旨をさらに要約すれば、——第一回日本医学会案は、純学会案としては欠陥のあるものだが、知識交換の会としては現状に即応した意義をみとめることができる。ただし、将来の真学会はこういう性質のものであってはならない。——ということになる。つまり、現状論としてこれを肯定し、本質論としてこれを否定したわけで、細心な表現の注意にもかかわらず(特に石黒忠恵への配慮がいちじるしい)。論はやはり、その否定的側面において重くこたえる。

だから、『医事新聞』は、鵬外のこの論をさらに一つのこととし

て、一層はげしく日本医学会案を追及したのである。同誌三一四号、三一五号(一〇・七、一〇・二二)にのつた、出入子の「日本医学会ニ就テ」がそれである。格別新見の提示があるわけではないが、若シ諸老ニシテ強ヒテ乙酉会ノ名ヲ以テセント欲セハ何ノ他ノ学会ニモ通牒シテ共ニ与ニ発起者ノ位置ニ立サル特ニ吾曹相謀リ私ニ医学社会ノ為メニ謀ル所アリト云ヒ仮ニ各百金ヲ齎シテ云々ト言ヘル如キハ傲慢不遜実ニ他ヲ憚カラサル者ト謂フ可シ」と、もはや歯に衣をさせないで難詰し、乙酉会を「過激学土ヤ登芝生ヲ遮障スル一大藩籬ナリ」とも言うにいたっている。さらに、三一五号では、鵬外の注疏をとりあげつつ、諸名参招聘の会は、知識の交換どころか、「知識ノ棚下シ、分配」の会であるとし、しかも、それを受ける者は、およそ学問と縁のない全国開業医であるのに(正規の教育を経た者は百分の二にすぎぬと言っている)。これを名づけるに日本医学会としたことを、羊頭狗肉として攻撃している。そして、田代義徳の「業務説」の重要性を再強調することで文を閉じているのだが、鵬外の分析は、こういう論難に対してむしろ一握根を提出したという観がなくはないのである。

また、やがての鵬外は、この出入子の論法をそのままうけつぐかたちで、いわゆる「老策士たち」と対決することになるのだが、それはのちのこととして、とにかく、こういうかれの微妙な立論の上に、私たちは、この時期における鵬外の、まことに興味ぶかい位置と姿勢とをうかがうことができるのである。

さきにも述べたように、このころのかれは、当時の一流誌であり、乙酉会諸老とも関係のふかい『東京医事新誌』の主筆であり(かれをそこへ推挙したのは、軍医長老松本順である)。また、

今度の提案の立役者石黒忠の直屬の部下でもある。(石黒は、二一年に陸軍軍医学校長へ初代V、二三年に陸軍省医務局長になっている。鷗外は当時陸軍軍医学校教官である。)当然、かれには、たとえ暗黙のうちにも、第一会日本医学会提唱のスポークスマン的な役割が期せられていたと推測してよいだろう。事実、かれは、一応その役わりをつとめた。反対者に対し、現状論の立場から、この学会案の妥当性を説いたのである。たとえ微瑕は指摘しても、その全体は白璧として論じたのである。

けれども、その論のはこびは、いま見てきたように、あまりにも含みの多いものであった。ドイツ学会を範としている鷗外個人は、あきらかにこの学会案に不満であった。乙酉会が主権をにぎる、その非民主的な運営についても、参会者の資格についても、諸名家の講演を主体とする会合様式についても、その講演あるいは研究発表の質の問題についても、かれは不満であった。その点において、かれの内心は反対者の意見とはほとんど等しかったと見てよい。そこで、かれは、この会を、学会ではなく、知識交換の会、あるいは知識授受の会と規定し、そういう明確な弁別の上に、一応暫定的にこの会の意義を承認しようとしたのである。そして、そのことによつて反対者を説得するとともに、主催者がわにも釘をさそうとしたのである。おもてに擁護の立場をとり、うらに批判の針をふくませたこの論法は、まことにひねった、苦肉の策戦といふべきだが、これは、後年のかれが、権力のうちがわにいて、それをチェックしてゆこうとした、あの動きを想起させる。あるいは、これはその走り、と言つてもよいかもしれない。

だが、鷗外のこういふ立論が、乙酉会のがわに不快の念をあたえ

たであらうことは容易に察せられる。広告にうたった「知識ノ交換」ということばにも、鷗外の言うよりな存意がふくまれていたとはかならずしも思われぬし、石黒の書翰は、はっきり、この会がドイツの万有学会のように発展することを期してもいる。のちに鷗外は、自分のこの論を、「諷刺の意を婉曲の筆に寓」したものの、「イロニー」であつたと言ひ、そのことは、「当時の説者大抵これを領解したり。」と述べているが(「六たび反動機關を論ず」二六年一月「衛生療病志」)、もしそうであつたとすれば、いよいよこの一石が主催者がわにあたえた波紋は決して小さくなかつたであらうと推察される。

そして、私は、鷗外がこの年の一月に『東京医事新誌』局から逐われるにいたつた(推挙者松本翁からは譴責された。)主要因はここにあつたのではないか、と思ふのである。二四年九月の談話「森林太郎氏が履歴の概略」(『東京医事新誌』七〇一号)のなかでは、「『スタチスチック』社と争論が起り、久しく結んで解けなかつた為、是では東京医事新誌の為不利だといふ説があつて、遂にその方の筆を廃め」たとあるが、たとえそのことが口実にされたにしても、一統計雑誌との論争などは大した問題だとは思われぬ。全体として、万事にわたる、鷗外の必要以上の争気が荷厄介にされたであらうことは察するに難くないが、鷗外追放の主要因は、やはり医学会問題を中心とする、乙酉会との隠微な確執にあつたと見ることが妥当ではないか。泥試合の観を呈しかけた統計論争は、追放のよいきっかけをつくつたものと言つてよいだろう。

追放直後の宣言「敢て天下の医師に告ぐ」(二二年一月『医事新論』創刊号)のなかで、かれが「余の医材に於けるや現に敗軍の一

将たり、伶仃孤立、狼の狼を失ひしが如く海月の蝦を離れしが如し。」と述べた背景は多分ここにある。乙酉会メンバーは、明治医界の長老たちであり、これと対立した鷗外は、結局ひとり狼になってしまふのである。たとえば、最初に日本医学会案にくってかかった『医事新聞』も、以上にかかげた論の以後には、まったく批判を出さなくなり、主筆田代義徳はこの会に参加して、一つの役わりを果たすようになる。また、鷗外のなかまである青山胤通、中浜東一郎、賀古鶴所、小金井良精なども、すべてこの会に参加して講演している。ただ鷗外ひとり、直前において発起人あてに手紙を出し、第一回医学会にふさわしい自信のある発表ができないという、針をふくんだ理由をもって招聘講演をことわり(二三・四・三 手紙)、結局参加しなかった。(そう推定できる。)確執はここで決定的になつたわけである。

三

だが、この、結果の説明は実はすこし早すぎたので、そのまえに、新たに『医事新論』によつた鷗外と、『東京医事新誌』において鷗外のとをついだ岡田和一郎との間に、私が『東京医事新誌』『緒論』論争」と名づけた(『近代文学論争事典』)一連の論争がおこっている。これが、医学会論争と密接にからみあっているのである。

もはや詳述はさげなければならぬが、岡田が、『東京医事新誌』六一四号(二三・一・四)に書いた「明治廿三年ノ東京医事新誌」がそのきっかけをつくつた。かれは、そこで、二二年度の編者鷗外

の功績をたたえるときにも、緒論の倒壊にふれ、これは、倒したのではなく、倒れたのだと述べ、時勢にしたがって誌面を改革すると、その大綱をかかげた。詮ずるところ、その要点は、二二年度の新誌が、時評としての緒論を巻頭にかかげて、原著にくらべてどちらかといへば時論の比重が重かつたのに対し、新年度は、原著をさきにしてこれに比重をかけ、時評欄は「雑録」として軽い扱いしようとするところにあつた。岡田はそれを、學術進歩の現況(日本医学会の組織づくりをその一例証としてあげている。)に適應した処置としたのである。

ところが、これが、追放の憤懣なおさまらない鷗外の冊にさわつたのである。かれはただちに、「悪声」「ひらき封一通」を書いて(『医事新論』三号△二・九五)はげしくこれに反撃した。岡田の言う新時勢がはたして緒論と不適合であるか否かを問いつめ、緒論は時勢によって倒れたのではなく、特定の分子によって倒されたのだ、と反論したのである。なかで、かれは、別に敵でもない岡田がこういう発言をあえてするのを、俠客の徒党的な「喧嘩買」にたとえて難詰したが、一方、岡田は、鷗外のこういう語鋒に辟易しながらも、「喧嘩買ハ何処ニカ在ル」を書いてこれに応酬した。(『東京医事新誌』六二一号△二・二二〇)

時代が進めば、医学者は學術研究を通して「政事」を助けるという風になるはずだし、また日本医学会がひらかれれば「原著も繁を加」えることにならうから、いずれにしろ緒論欄の命脈は短縮されざるをえない運命にある、というのがその文旨だが、同時に、自分の前に書いた文章は決して「悪声を出す積り」のものではなかつたと釈明し、「以後先生より此事に関し如何なる御議論を差向けらる

「も私しに於ては決して是に應ずることを致しません」と、対峙の解消をはかった。岡田には、はじめから、鷗外を敵として立つほどの底意も、勇氣もなかったと見てよいだろう。

このやりとりでは、兩者ともに、具体的にだれが鷗外を逐ったかは言いたくないと述べていることが印象的であるが、言いたくないと言ふのだから、もちろん兩者ともにそのかけの力を知っているわけである。そして、それが乙酉会方面のものにほかならなかったことは、いままでの論述によってほぼ明かだと言つてよいだろう。岡田は、その勢力によって鷗外のかわりにすえられた人物にはかならなかつたのである。(医科大学教授である岡田は、のちに鷗外再婚の媒妁人となつた。鷗外が本質的に敵と見なした人物ではない。)

この岡田の応答が出た『東京医事新誌』の次の号(六一五号八一・一一V)では、変遷居士が「医事新論ニ就テ」を書き、『医事新論』の創刊を祝するとともに、主客対話のかたちで、緒論における鷗外の、僧医論、統計論、律詩、和歌等の「燦爛タル文字」を実験医学に關係しないものと批評し、今後の医事新論が真に実験医学の方向に業績をあげることを期待し、あわせて、医科大学外に独立した鷗外の活動に喝采を送つたが、鷗外は、以上の両論に答える文を『医事新論』五号(四・九)にのせた。「第一回日本医学会と東京医事新誌と」がそれである。

鷗外は、その前段において、岡田と変遷居士の言ひところを一つ一つしらみつぶしに反駁したが、つまるところ、その主張はこうである。医学の題目は、ほとんど皆社会の全体・政治・哲理に關係するもので、この点を「論徹」したのでなければ、実験医学の面目を世間にあらわすことができない。緒論は、はじめから、医学研究

の發表の場としてではなく、その「一種の応用」を論ずる場としてつくつたもので、それが実験医学に直接關係がないのは当然のことである。しかも、これは、実験医学の地をつくるに重要な仕事で、比較していえば、いまの雑誌に原著として出る一治験、一病歴の報告などは、学問として「歯牙に挂くるに足ら」ないものが多い。岡田も変遷居士も、この理を解せず、学問の輓推と学問の応用とを混同して論を立てている。

ざっとこんな論旨であるが、つづいて後半で、岡田の期待する第一回日本医学会のことに筆をうつし、『東京医事新誌』六二五号に發表されたその「日割一覽表」を批評して、予想どおり、その題目に、真に學術研究と稱するに足るもの少いことを指摘した。

この再駁論のほかに、鷗外は、「悪声絶」の一文を同号にのせて、鷗外と岡田との間の仲裁に立つた服部霞峯の手紙をかかげるとともに、岡田がふたたび悪声を出さぬとすれば、自分も沈黙する旨を宣言した。

しかし、鷗外は、これだけで黙しきることはできなかった。かれは、第一回日本医学会開催後の『医事新論』六号(五・九)において、「第一回日本医学会余波の論」を書き、自分の医学会論の最後のしめくくりをつけるとともに、同会の直前に岡田和一郎が發表した「第一回日本医学会ニ就テ」(同会々員諸君ニ告ク)という一文(『東京医事新誌』六二六号八三・二五V)に執拗にからんだのである。

岡田のその論は、鷗外のかねてよりの医学会批判にある程度かき趣旨のものであつた。かれは、医学会の日程を通覧したところ、意に満たぬものがあつたとして、知識交換の会として期待した日本

医学会が知識分身の会のごときおもむきを呈していることを批判したのである。つまり、「角力ノ番附然ト」在京名士の講演がならんでいて、会員の発表者が少く、しかも談話（討議）の時間の乏しいことを嘆じて、特に地方会員が大いに談論して東京人士に聞かすべきことを勧奨し、そのためさらに一日の談話を聞くよう斡旋の勞をとつてもよい、と述べたのである。

これに対し、鷗外は、かれ自身がとつくに指摘したことはいまごろようやく気がつく迂愚を笑うとともに、その処方、知識交換を言いながら、その裏、地方から東京への逆分与を主張するものにはかならないではないかという論理で、その矛盾と非実際性とを働いたのであるが、なかばはあげ足とりにちかこの反駁には、論敵にむかつては執拗に最後のとどめまでさきずにはおかない鷗外のはなはだしく拘執的な性格がよくうかがわれるという以上に、とりたてて言うべきことはない。

また実際、このいまさらしい岡田攻撃は、この文全体としてもいわばつけたりで、かれがこの論で明確にうちだそうとしたのは、日本医学会の継続開催を否定することであった。かれはここでも、第一回日本医学会を、学会ではない知識交換会として一応認めるといふ立場をくずしていないが、その会合の席上で、第二回日本医学会開催を希望する声がおこったという報道にふれて（乙酉会は、これを恒久の会とするはつきりした意図は示していなかった。）この種の会は二度と開かれてはならないと明確に言いきつたのである。この組織を改正して真学会にすればよいという意見をもきびしく否定して、「これを変じて学問輪推会となさむとするは、猶繼墨を執て類瓦破屋に臨むがごとし。」と断じ、「真正の学会、即ち学

問輪推の会の正当なる組織を以て起らむを待つものなり。」という本心からの期待を、もはやはばかりところなくはつきりうちだしたのである。野におりた鷗外は、これで、言いたいことを一応言いきつたわけであるが、これに対する反応はもはや表立ってはあらわれなかった。そして論争は終結したのである。

四

ところで、この時、医界の趨勢は、全体としてどう動いていたか。第一回日本医学会は実に盛会であった。『東京医事新誌』は五号にわたつて（六二七号―六三一号）精細にこれを報道しているが、参する者千七八百名、会衆は堂にあふれ、来賓は、文部次官、警視總監、東京府知事らをはじめとして数十名の多きにおよんでいる。陸軍軍楽隊の吹奏裡に開会、先進閩医を祭る儀式からはじめて、岩佐純、石黒忠恵、長与専齋、松本順、長谷川泰らが次々に儀式壇上に立っている。なかでも中心人物は石黒忠恵である。そして、以後一週間にわたつて、医学者として名のある者はほとんど演壇に立っている。各会場での展示物も数多い。会場前では、巡査数名が数百の車馬の整理にあたっているありさまで、『東京医事新誌』の形容によれば、「前代未聞の盛会」である。そして、鷗外ひとり、このお祭りさわぎを遠くからにがにがしく傍観していたのである。その場になつて演説を拒絶して閉じこもつた鷗外の心底には、こんなお祭りにうつつをぬかしている日本医学会水準の低さに対する憤りがうずまいていたと言つてよいだろう。

しかも、さきに批判の声をあげていた者たちも、みな、この勢い

にのみこまれてしまっていた。直前にわずかに岡田の示した批判のポーズなどは、飼猫のごさかしきとして、鷗外にはかえってにがにがしく思われたにすぎない。

一方、逆に、主催者がわがごうという鷗外の反抗をどう考えたかは、資料に徴するものがないが、ということは、かれらの黙殺政策を示していると言ってよい。この論理に長じたすね者を直接相手にするのはうるさいし、長老の權威にもかかわる。かといって、個人誌によつた鷗外をだまらせるすべもない。渺たる「医事新論」の主張などは無視するに如くはないと思われたであらう。そして、大勢は鷗外をとりはずしたまま進んでいったのである。

もちろん、鷗外にも一応の仲間はいたし、かれ自身、その組織化に努力しなかつたわけではない。二三年に結成された日本公衆医事会はその具現であるが、のち、二六年五月に、同会第一集會が議決した「医学会に関する意見」「医会に関する意見」が、鷗外の主張をほとんどそのまま採用したものであることは、すでに、松原純一氏も指摘している。（「森鷗外『傍観機関』論」人相模女子大学紀要一一二号V）しかし、たとえかげで鷗外を支持し、声援を送る者はいたとしても、直接筆をとつて鷗外に組する者はだれもいなかったし、日本医学会に背を向けた者もいなかった。河村敬吉によれば、鷗外は、青山胤通のスポークスマンと見られていたふしもあるらしいが、しかし、鷗外の徹底的にラディカルな動きは、そうした仲間關係をこえてしまつていたと見ることが正しいだろう。

医界元老を向うにまわしての鷗外のたたかいは以上の論戦でおわつたのでは決してない。むしろこれは出発点にはかならなかつたので、やがて、二六年四月を期して、鷗外があれほど排斥した第二回

日本医学会が開かれ、また、それを機に恒久団体としての大日本医学会が結成されようとするや、鷗外はふたたび立つて、決定的な舌戦を開始するのである。有名な「傍観機関」論争がそれである。もはや一切の遠慮をかなぐりすてた鷗外は、第一回・第二回日本医学会を反動祭とよめつけ、それは、伝訳者にすぎぬ医界元老連が、皇漢医主体の開業医を集めて、学問権を真学者から奪おうとする策謀にほかならぬ、と断言するにいたるのである。その委細はいまは問うところではないが、第一回の論戦でなおかならずしも明かでなかつた鷗外の意中は、ここで一層明瞭になるわけである。

しかも、この場合も、鷗外のたたかいはまったく孤立しており、鷗外以外の学者はすべて第二回の會合に参加し、また、乙酉會メンパーは決して論戦場に登場しなかつたことなど、すべて第一回の場合と軌を一にしているのである。さすがの鷗外も、真学者なお頼むに足らずと言わざるをえず、結局、その矛はむなしく空を撃つてやむことになるのである。そして、以後かれはまったく緘黙するわけであるが、やがてかれが小倉に移されるにいたる遠因は、この経緯における孤立的闘争、特に軍医界の與力者石黒（およびその一派）との対立にあつたと見ておそらくよいのではないか。

私はこのたたかいを鷗外の生涯において最も重視するものだが、それはとにかく、その発端をなす論戦の委細は以上のとおりである。

（三七年一月）

（広島大学助教授）